「石磏」 荒尾精書

「石磏　明治乙未歳　牧野虎次君　立伝道之志　将赴北海道　特書為餞」（右から）

この書は 1895（明治 28）年、荒尾精が牧野虎次（後の第 11 代同志社総長）記念として贈ったものである。牧野は 1894 年に大阪滞在中の荒尾に講演の依頼をしたのがきっかけで、講演後に京都・若王子へ転居してきた荒尾宅を訪れ、その影響を受け清国へ志を持つようになる。

しかし、重罪犯の集団「北海道集治監」教誨師を志していた同志社内の有志団体「心友」の一員であった大塚素らに勧められ、北海道へ渡ることを決意する。1895 年 2 月 11 日、牧野の数時間におよぶ心境の告白を聞いた荒尾は、餞別として「石磏」をしたためたのである。その意味について、「石鹼（以下、引用文中は「石鹼」）はみずから消えて相手の垢を落とすのだ、自分が消えるというのが石鹼の秘訣だ。・・・ただ自ら消えて相手の垢を落とす石鹼の秘訣をのみ心得よ」と説いたのである。

この書は牧野宅にあったが、1964（昭和 39）年 2 月に亡くなった後、東亜同文書院同窓会組織「滬友会」に寄贈された。さらに東亜同文書大学記念センターに寄贈され、現在は同センターの貴重なコレクションの１つとなっている（書の由来は『滬友』第 13 号より）。